学校法人　仙台育英学園　秀光中等教育学校

二〇一五年度　東京選抜試験

国　語

（第一問～第三問）

注意

・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
・この問題冊子は十二ページあります。
・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

イギリス十九世紀の小説家にウォルター・スコットという人がいる。すぐれた歴史小説を書いて、文学史上、有名である。

このスコットは寝て考えるタイプであったようだ。やっかいな問題がおこる。どうしたらいいだろう、などという話になると、彼はきまってこう言ったものだ、という。

「いや、くよくよすることはないさ。明日の朝、七時には解決しているよ」。

いまここで議論するより、①ひと晩寝て、目をさましてみれば、自然に、おちつくところへおちついている、ということを経験で知っていたからであろう。 A

朝の頭を信頼し、朝の思想に期待していたことになるが、これは何もスコットに限ったことではなさそうである。その証拠に、英語には「一晩寝て考える」（sleep over）という成句もある。朝になって浮ぶ考えがすぐれていることを、多くの人々が知っていたのだと思われる。

ガウスという大数学者がいた。ある発見をした記録の表紙に〝一八三五年一月二十三日、朝七時、起床前に発見〟などと書き入れた。「一晩寝て考えた」あるいは「いく晩も寝て考えた」ことが、朝になっておどり出たのであろうか。

ヘルムホルツも大科学者であったが、朝、目をさますと、そのとたんにすばらしい考えが浮んだ、と語っているそうだ。このような例を見てくると、発見は朝を好むらしい、ことがわかる。

〝三上〟という語がある。その昔、中国に欧陽修という人が、文章を作るときに、すぐれた考えがよく浮ぶ三つの場所として、馬上、枕上、厠上[注1]をあげた。これが三上である。この枕上というのは、普通は、夜、床に入ってからの時間のように考えられるが、そうではなく、朝、目をさましてから、起き上がるまでの時間ととれば、スコットも、ガウスも、ヘルムホルツも、枕上の実践家だったことになる。

だいたい、夜、寝る前に、あまり深刻なことを考えるのはよくない。寝つきを妨げる。眠ろうとすると、かえって、あとからあとからいろいろなことが頭に浮んでくる。 B

寝る前には、あまり、おもしろい本を読むのも②考えものである。いつまでも刺激が尾を引く。心が高ぶって、寝つきが悪い。おそくなってから、コーヒーや紅茶を飲むのはいけないのは知っているのに、興奮するような本を平気で読んでいる人がいる。なるべく、頭を騒がせないことだ。そして、朝を待つ。

枕上も、夜の時間ではなく、朝の枕上だと解したい。われわれの多くは、この朝のひとときをほとんど活用しないでいるのではあるまいか。a いやしくも、ものを考えようとするのであれば、目をさましてから、床を離れるまでの時間は聖なる思いに心をこらすことを心掛けるべきであろう。 C

そのためには、タネがいる。ぼんやりしていたのでは、何

も生れない。考えごとがあるから、着想が出てくる。

どうして、「一晩寝て」からいい考えが浮ぶのか、よくわからない。ただ、どうやら、問題から答が出るまでには時間がかかるということらしい。その間、ずっと考え続けていてはかえってよろしくない。しばらくそっとしておく。すると、考えが凝固する。それには夜寝ている時間がいいのであろう。

よく、〝朝から晩まで、ずっと考え続けた〟というようなことを言う人がある。いかにもよく考えたようだが、その実は、すっきりした見方ができなくなってしまっていることが多い。こだわりができる。③大局を見失って、枝葉に走って混乱することになりかねない。

前にも引き合いに出したが、外国に、

〝見つめるナベは煮えない〟

ということわざがある。早く煮えないか、早く煮えないか、とたえずナベのフタをとっていては、いつまでたっても煮えない。あまり注意しすぎては、かえって、結果がよろしくない。しばらくは放っておく時間が必要だということを教えたものである。

D

考えるときも同じことが言えそうだ。あまり考えつめては、問題の方がひっこんでしまう。出るべき芽も出られない。一晩寝てからだと、ナベの中はほどよく煮えているというのであろう。枕上の妙[注2]、ここにありというわけである。

ことと次第によっては、一晩では、短かすぎる場合がある。大きな問題なら、むしろ、長い間、寝させておかないと、解決に至らない。考え出して、すぐ答の出るようなものは、たいした問題ではないのである。本当の大問題は、長い間、心の中であたためておかないと、形をなさない。

W・W・ロストウはアメリカの経済学者で、ケネディ大統領の経済顧問として世界的に知られた人で、その『経済伸長[注3]論』は画期的な学説として高く評価された。その序論を読むとこの問題にはじめて関心をいだいたのは、ハーバードの学生としてであったと、書いてある。それから何十年もの歳月が流れている。忙しかったから、まとめるのが遅れたなどということではない。いつも、心にはあった。あたためていたのである。それがようやく、卵からかえったのである。こういうように、大問題はヒナにかえるまでに、長い歳月のかかることがある。

ロストウにしても、この理論にだけかかわっていたのではなかろう。ほかのことを考えることもあったに違いない。④それは、怠けていたのではない。時間を与えていたのである。〝見つめるナベ〟にしていたら、案外、途中で興味を失ってしまっていたかもしれない。

作家にとってもっともよい素材は幼少年時代の経験であると言われる。幼いころのことをもとにして書かれた、幼年物語、少年物語、そういう名はついていなくても、⑤そういう性格の作品が、すぐれていない作家は凡庸[注4]であるとしてよい。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

なぜ、作家の幼年、少年物語にすぐれたものが多いのか。素材が充分、寝させてあるからだろう。結晶になっているからである。余計なものは時の流れに洗われて風化してしまっている。長い間、心の中であたためられていたものには不思議な力がある。寝させていたテーマは、目をさますと、たいへんな活動をする。なにごともむやみと急いではいけない。人間には意志の力だけではどうにもならないことがある。それは時間が自然のうちに、意識を超えたところで、おちつくところへおちつかせてくれるのである。

問題の都合上、文章の一部を原文と変えています。

（外山滋比古「思考の整理学」）

注1　厠……お手洗い。トイレ。
注2　妙……ほんとうにすぐれていること。
注3　序論……本論の導入部分。
注4　凡庸……平凡で、とくにすぐれたところがないこと。

問一　〰〰線a、〰〰線bの語の意味として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a　いやしくも

ア　どこでも
イ　かりにも
ウ　いやでも
エ　どうしても

b　画期的な

ア　周りの期待どおりすぐれている。
イ　個性や特徴がはっきりしている。
ウ　将来を見とおせるほどすぐれている。
エ　新時代をきりひらくほどすぐれている。

問二　――線①「ひと晩寝て、目をさましてみれば、自然に、おちつくところへおちついている」とありますが、このように、スコットが「やっかいな問題」を解決したのは、いつの時間だと筆者は考えていますか。最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　夜通しずっと　　**イ**　目覚めの直前
ウ　何日もの夜じゅう　　**エ**　朝目覚めてから

問三　――線②「考えものである」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　よいとは思えないので考え直すほうがいいこと。
イ　大切なことなので十分考える必要があること。
ウ　必要ならばためらわないでやるのがいいこと。
エ　気持ちが引きつけられて頭が使いすぎになること。

問四　――線③「大局を見失って、枝葉に走って」とは「全体の主要なことがらを見ないで、部分部分のあまり大事でないものに目が行く」というような意味ですが、それと同じ意味を持つ四字熟語「枝葉□□」の□に入れる漢字二字を答えなさい。

問五　本文には次の一文が抜けています。これを入れるのに最もふさわしいのはどこですか。本文中の□A～Dから選び、記号で答えなさい。

こういうときに、妙案があらわれるのは難しい。

問六　――線④「それは、怠けていたのではない」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　ロストウは何十年も忙しく仕事をしたので何もしなかったのではないこと。
イ　ロストウは「経済伸長論」のほかの仕事もしっかりやりとおしたこと。
ウ　ロストウは学説を考え始めてから何十年間もあたため続けて完成したこと。
エ　ロストウは評価を得るチャンスをねらって難問の解決をあとで発表したこと。

問七　――線⑤「そういう性格の作品が、すぐれていない作家」とありますが、その作家が「すぐれていない」のは何が欠けているからですか。本文中の表現を用いて二十字以内で答えなさい。

問八　本文を大きく二つに分けるとすれば、その後半部分はどこから始まりますか。最初の五字を書き抜きなさい。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

問九　本文の題として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　見つめる　　**イ**　寝させる

ウ　努力する　　**エ**　議論する

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

磯山香織は剣道の名門高校の一年生。その剣道部はインターハイ県団体予選会において、三回戦で敗退し、全国大会連続出場を逃す結果となった。香織の不調が、敗因の一つでもあった。

大会翌日香織が帰宅すると、父親が香織に大会の話をしたことから口論となった。母と兄は、その場の気まずい空気をやわらげようとするが、香織は自分の部屋に入ってしまった。

さっきは勢いで言ってしまったが、いったん口にすると、その言葉は現実的な重みを帯びて、あたしの背中に覆いかぶさってきた。

剣道を、やめる――。

そんなことを考えたことは、今まで一度もなかった、と言ったらうそになる。小さい頃は確かに、何度かあった。痛かったり、稽古がきつかったり、もっと友達と遊びたかったり、そんな理由で、剣道をやめたらどうなるか、想像してみたことはあった。でも小学校の中頃から、あたしは大会に出れば必ず入賞できるようになった。そこまでくると、もうやめたいとは思わなくなった。もっと強くなりたい。上にいきたい。そのためなら、どんなにつらい稽古でも耐えてみせる。そう思うようになった。ついこの前までは、同じ気持ちで、剣道ができていた。

I　、今はどうだ。

何かがずれてしまった。注1西荻には、とっさに「Ⅱ」が狂った」などと言ってしまったが、まさにそうなのかもしれないと、今になって思う。

「……香織」

襖の向こうで声がし、あたしはベッドから起き上がった。兄だ。

「入っていい？」

「うん……いいけど」

戸口に覗いた顔はさっきのまま、困ったような、半泣きのような表情だった。そのまま、体を横にして入ってくる。

あたしの部屋は兄のところと違い、フローリングになっている。でも、フロアマットも座布団もない。基本的に、床には何も置かない主義なのだ。

机の椅子を勧めたが、兄は首を横に振り、①直接床に座った。あたしも、なんとなくベッドから下りた。

Tシャツの袖から覗く上腕は、剣道をやっているときより明らかに太くなっている。ボートだから、よほど腕の力を使うのだろうが、だったらなおのこと、剣道をやめたことが悔やまれる。そのパワーがあれば、以前とはまた違った戦い方ができるだろうに――。

ふいに、すとんと体から抜け落ちるものがあった。

なに馬鹿なことを考えてるんだ。あたしだって、いま剣道をやめようとしているのに。

「香織……父さんに、謝ってこいよ」

Ⅲ、用向きはそんなところだろうと思っていたが、実際に言われるとやはり腹が立つ。

「なんであたしが謝らなきゃいけないの。わざわざ呼び止めて、睨みつけて嫌味言ったのあっちじゃん」

「いや……」

悔しそうに、兄は奥歯を噛み締めた。

「……だからそれは、父さんの言い方だって、悪いとは思うよ。僕だって……でも、昨日や今日始まったことじゃないだろ。香織と父さんのいがみ合いは」

ほんと、いつからだろう。こんなふうになっちゃったのは――。

②「もうやめなよ。母さんだって泣いてるよ」

「知ったこっちゃないね」

「そういうこと言うなよ」

「だって、あの人素人だもん」

「そんなの関係ない。母さんは母さんだろ。親なんだから、家族なんだから、心配するのは……」

「あたしは今、剣道の話をしてるんだよ」

兄は固く目を閉じ、小刻みに頷いた。

「……分かった。じゃあ剣道の話をしよう。あんな、③売り言葉に買い言葉で、剣道をやめるなんて言うなよ。もちろん、本気じゃないとは思うけど」

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

Ⅳ

。さすが、優等生はなんでもお見通しってわけか。でも、残念でした。

「別に、売り言葉に買い言葉で言ったんじゃないよ。ここんとこ、ちょっと考えてたんだ。あたし、マジで剣道、やめるかもしんない」

「なんでだよ」

今までのあたしになら、その質問も有効だったろう。なぜ剣道をやめるのか。でも今あたしがほしいのは、なぜ剣道を続けるのかって、そっちの方の答えだ。

「……あの人だって、あたしがやめりゃ清々するでしょ。なんでかしんないけど、あたしが剣道やってるのが、④滅法お気に召さないようだから」

「そんなはずあるかよ」

「ハァ？　兄ちゃん、さっきのアレ聞いてなかったの？　あの人、あたしに剣道やめさせたくて仕方ないんだよ」

「違う。絶対にそんなことはない」

「なんで断言できんのよ」

「それだけは違うんだ」

「何が違うのよ」

「父さんが香織に剣道やめさせたいなんて思うわけないんだ。絶対にそれだけはないんだ。そんなの、⑤お前が知らないだけなんだ」

だが、言った途端兄は、マズった、みたいに顔をしかめた。

あたしが、知らない――？

「……ちょっと、なにそれ。どういうこと」

目を逸らし、深く息を吐く。言うか否かを迷っているようだが、ここまできて、適当な言い逃れで切り抜けられると思ってもらっては困る。

「なによ。あたしが、なにを知らないっていうの」

兄は口を尖らせ、床に視線をさ迷わせた。

いつのまにか、雨が降り始めたらしかった。窓の外がやかましい。

やがて心を決めたか、兄は今度は真っ直ぐ、あたしの目を見た。

「……父さんは、ほとんど欠かさず、香織の試合を、会場まで見にいってるよ。関係者に結果だけ聞いてるっていうのは、うそだ。本当は何日も前から仕事の都合をつけて、毎回見にいってる。それが無理なら知り合いにビデオ撮影を頼んで、あとでこっそり、香織のいないときに見てる」

なんで、そんな――。

「不思議？　分からない？　なんでそんなうそまでついて、回りくどいことをするのか……僕には、分かるよ。痛いほど。二人とも意地っ張りで、不器用で。……よく似てるよ。笑っちゃうくらいそっくりだよ」

そのくせ、兄の目には涙が浮かんできていた。

「……でも、やっぱり親なんだよ。香織のこと、いつだって心配してる。父さんは、注2玄明先生に対しても敬意を持ってると思う。あの剣道を否定してるわけじゃない。ただ、香織は

勝気だから……あの剣道の、攻撃的な部分にだけ執着して、傾倒[注3]していくのが怖いんだよ。それでも、香織の意思を無視することはしなかったろ？　一度だって、香織を玄明先生から引き離そうとしたことがあった？　なかったろ。その代わり、僕に頼むって、あの父さんが、頭を下げたことがあったよ……香織が中学に入るまで、一緒に桐谷道場に通ってやってくれって。香織を、見守ってやってくれって。それがなかったら、僕はもっと早く剣道をやめてたよ」

そんなの、ずるいよ、今になって、そんなこと――。

「分かる？　香織。お前は、決して一人で強くなったわけじゃないんだ。色んな人に支えられてここまできたんだよ。特に父さんには……ねえ、思い出してごらん。香織は、剣道始めるときになんて言った？　兄ちゃんばっかじゃずるい、あたしも父さんに褒められたいって、そう言って始めたんだよ。父さんは、香織の憧れだったはずだよ。最初に勝ちたいって思ったのだって、父さんに褒められたかったからでしょ？　違う？」

思い出せない。そんな、昔のこと――。

「香織は、岡くんが僕に勝ったこと、彼が父さんの生徒だったこと、すごく恨んでるみたいに言うけど、本当は違うんだろ。香織、あのとき泣いたよね。でもあれ、僕が岡くんに負けたからじゃないんじゃない？　本当は、父さんが岡くんを褒めたから、それも……僕たちには見せないような、優しい顔で笑いかけたのが、悔しかったんじゃないの？　そのあとで、香織、言ったじゃない。あたし、父さんのあんな顔、見たことないって……」

そうだったろうか。そう、だったかも、しれない――。

「僕もね、確かに悲しかったよ。あのときは。でもさ、いま考えると、当たり前かなって気がするよ。だって、あれが父さんの仕事なんだもん。警察で剣道を教えて、その生徒が勝ったら、そりゃ褒めるよ。僕たちにああいう顔をしなかったのは、それは、親子だからでしょう？　親子だからこそ、よその子より厳しくできるんじゃない。僕は剣道をやめたから、逆によく見えるんだよ。香織が自分の子だから、父さんは、なおさら甘くしちゃいけない、甘くしちゃいけないって、ずっと自分に言い聞かせてきたんだと思うよ。そういう人なんだから、⑥頑固な人なんだから、そういうとこ、香織が分かってあげなくて、誰が分かってあげられるの」

兄は頬を拭い、少し背中を丸めて、息をついた。

「……香織がやめたいって言うなら、仕方ない。僕は止めないし、父さんも止めないと思う。でもその前に、思い出してごらん。父さんを好きだった、あの頃のこと。父さんと剣道やるのが、楽しかった頃のこと。父さんに褒めてもらって、嬉しかった頃のこと。……やめるのは、それからだって遅くないでしょ」

もう一度息をついて、兄は立ち上がった。座っていたとこ

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

ろには、小さな水溜りだけが残った。

「……たまには、一緒に稽古してみたらどう。きっと、父さんも喜ぶと思うよ」

絶対やだ。冗談じゃない――。

でも思うだけで、どうしても、そうは言えなかった。

（誉田哲也「武士道シックスティーン」）

注1　西荻……香織のライバルであり親友。
注2　玄明先生……桐谷道場の先生。
注3　傾倒……人や物にうちこんで、熱中すること。

問一　□Ⅰ□Ⅲ□Ⅳに入れるのに最もふさわしいものを次の**ア**～**カ**からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　へえ　　**イ**　なんと　　**ウ**　まあ
エ　だが　　**オ**　そして　　**カ**　おや

問二　□Ⅱに入れるのに最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　口車　　**イ**　滑車
ウ　肩車　　**エ**　歯車

問三　――線①「直接床に座った」とありますが、その時の兄の気持ちとして、最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　椅子は妹のものなので遠慮し、座ったほうが父さん母さんの気持ちを伝えやすいと思ったから。
イ　剣道ではいつも床に座っていたので、そのほうが自分にとっては話しやすいと思ったから。
ウ　床に座ると妹と目が合わなくなり、父さん母さんの気持ちを語りやすいと思ったから。
エ　座ることで、じっくりと父さん母さんの気持ちを語り、妹にも真剣に聞いてほしいと思ったから。

問四　――線②「もうやめなよ」とありますが、その内容を本文中から十五字以内で書き抜きなさい。

問五　――線③「売り言葉に買い言葉」、――線④「滅法お気に召さない」の本文中での意味として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③　売り言葉に買い言葉

ア　相手の乱暴な言葉に対してこちらもちょっと考えて言い返すこと。
イ　相手の丁寧（ていねい）な言葉に対してこちらも丁寧な言葉で言い返すこと。
ウ　相手の深く考えた言葉に対してこちらも深く考えた言葉で言い返すこと。
エ　相手の乱暴な言葉に対してこちらも乱暴な言葉で言い返すこと。

④　滅法お気に召さない

ア　まったく気に入っていらっしゃらない
イ　まんざらお嫌でもないかもしれない
ウ　非常におもしろくお思いではない
エ　案外お気に入りではいらっしゃらない

問六　――線⑤「お前が知らないだけなんだ」とありますが、何を知らないのですか。その内容を本文中の表現を用いて、七十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

問七　――線⑥「頑固な人なんだから、そういうとこ、香織が分かってあげなくて、誰が分かってあげられるの」とありますが、父親と香織の共通する性格を本文中から十字で書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

第三問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

宮崎県のある山村には①猟師が山に入る前に唱えなければならぬ呪文[注1]があった。「ただいま、下のコウザキにヤタテを撃ってあげもうす。ただいま、上のコウザキにヤタテを撃ってあげもうす。火の車に乗って②お上がりなさってたもれ」。

コウザキとは九州地方の狩猟神の名、ヤタテは空砲、火の車は銃口の火を指すという。イノシシやシカが生息する山中の猟場は「カクラ」と呼ばれ、③暦によって猟ができる方角が決まっていた。入山が禁じられる方角は山の神が守っており、獣が逃げ込む場所だった。

山の［A］を享受する暮らしは、厳しい山のおきてに従い、自然の大きな均衡を保つ営みでもあった（遠藤ケイ著「熊を殺すと雨が降る」）。だが今、猟師たちがいなくなった山で自然のバランスが大きく［B］いるという。

農作物のショクガイや生態系への深刻な影響をもたらしているシカやイノシシの急増である。その捕獲を促進する改正鳥獣保護法が成立した。ハンター[注2]がこの四十年で六割も減り、高齢化する一方、ニホンジカの場合は二十年間で九倍近くにも増えてきたというのが現状という。

従来の「保護」から生息数の適正な「管理」へ、というヤセイ鳥獣をめぐる政策転換である。増えすぎた鳥獣は都道府県や国が管理計画にもとづく捕獲事業を行うが、そこでは民間企業の参入を促すという。④はてさてビジネスとしての捕獲に入山の呪文はあるのだろうか。

「コウミヤ」とは先の村で獲物の肉をホウノウする神楽（かぐら）が舞われる場所であった。⑤今もまた捕獲したシカやイノシシの食肉利用に工夫をこらし、自然の恵みに感謝するのが山の神への礼儀というものだろう。

（毎日新聞「余録」二〇一四年五月二十四日掲載）

注1　呪文……神や仏、神秘的なものの威力を借りようとして口にすることば。

注2　ハンター……山で生活する猟師のほか、銃で狩りをする人。

問一　〜〜線a〜eのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

a　唱え　　b　獣（訓読みを書きなさい）

c　ショクガイ　　d　ヤセイ　　e　ホウノウ

問二　――線①「猟」の総画数は何画ですか。またこの字の太字の部分は何画目ですか。それぞれ漢数字で答えなさい。

猟↑

問三　――線②「お上がりなさってたもれ」とありますが、「お上がりなさる」のはだれですか。

問四　――線③「暦によって猟ができる方角が決まっていた」の「暦によって」とは、その土地の風習による日にちの区切り方ですが、どんな目的で、猟をするときにそのように決めたのですか。本文中の表現を用いて、十五字ほどで答えなさい。

問五　□Aに入れることばとしてふさわしいものを、本文中から書き抜きなさい。

問六　□Bに入れるのに最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　崩(くず)れて　　イ　壊(こわ)れて
ウ　失って　　エ　傾(かたむ)いて

問七　――線④「はてさて」には筆者のどのような気持ちがこめられていますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　共感　　イ　いかり
ウ　うたがい　　エ　期待

問八　――線⑤「今もまた捕獲したシカやイノシシの食肉利用に工夫をこらし、自然の恵みに感謝するのが山の神への礼儀というものだろう」とありますが、これはどのようなことを言っているのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　「コウミヤ」では獲物の肉をささげ神楽を舞って、山の神に感謝することが続いていること。
イ　たとえ捕獲事業に企業が参入しても、自然への感謝を大切にし忘れないようにすること。
ウ　山に猟師がいなくなった今であっても、猟師が守ってきたとおりの食肉利用をすること。
エ　生態系への悪影響をなくし山の自然のバランスを保つために、山の神を敬(うやま)うようにすること。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）